

琵琶湖・淀川の未来を見つめる情報誌

BY BLUE

BIWAKO YODOGAWA

AUTUMN 2000

Vol.7



●特集

シンポジウム

「琵琶湖・淀川の変化を診る」

●BY BLUEレポート

大阪府公害監視センター

環境都市の創造をめざし、
ダイオキシン対策にも対応

水のある風景

ある時は静寂の流れに、ある時は迫り来るしぐきに、水は自在にその姿を変える。思いのまま周囲の自然と戯れる。その奔放さに、人は密かな憧れを抱く…

PHOTO JOURNEY
猪名川・屏風岩

7



清く穏やかな猪名川の渓流に突然現れる、
高さ30m、幅100mもの岸壁。
そびえ立つさまが屏風のように見えることから、
その名がついた奇岩。周囲の様々な木々は四季折々に表情を変え、
水の流れとともに、みごとな景観を創りだします。

「水のある風景」 写真募集

(採用させていただいた方には)
記念品を差し上げます

このコーナーでは、あなたが写した写真を募集しています。

[応募要領] 撮影場所・撮影年番号を明記して下記まで。

〒541-0041 大阪市中央区北浜1-1-30 横井北浜ビル3F (財)琵琶湖・淀川水質保全機構「水のある風景」係
応募いただいた作品はご返却できませんのでご了承ください。

琵琶湖 全ての命を生かす存在として

始点・
視点

暮らしや意識から遠い存在に

里山は、日本古来の農業環境を中心として人と生き物がせめぎあいながらも一緒に暮らしている全ての空間。自然と人が対話できる、一番大切にしなければならない身近な自然だと思っています。世界中に里山はありますが、中でも日本の里山の多様性は秀でています。それは、やはり水環境が豊かで、田んぼを中心とした環境があるからなのです。田んぼの畦沿いに水路があり、それは小川につながり、小川はため池に注ぐ...そんな水環境の中に多様な生き物が集まってくるのです。

でも、こんな豊かな里山の自然も、人々が農業や「米」から離れていくことで崩れていきます。私が住む滋賀の琵琶湖では水環境の悪化が言われていますが、これも人々の生活や意識が琵琶湖から遠ざかってしまったことが原因の一つ。琵琶湖で野菜を洗うなんてことももう無いし、道路に隔てられて湖岸が遠くなってしまった...。生活の中で琵琶湖の存在を五感で感じる事が少なくなってしまったようです。

共生のための新たな自然観

しかし実際問題として、再び琵琶湖を暮らしや意識に呼び戻すことは容易ではありません。これから私たちが琵琶湖という大自然とつきあっていくためには、琵琶湖に対して新しい意識を持つことが必要だと思えます。これまでのような「生活の水がめ」として琵琶湖を見るのではなく、人間を含めた生き物全ての命を生かしてくれる存在として琵琶湖を受け止めることが必要です。

これまで私たちは、自然に対しても均一化されたものや、徹底して整備されたものに美しさを感じてきました。でも、これから自然と共生していくためには、畦道の雑草や土手に混生するさまざまな植物、といった雑多なものをきれいだと感じる事が大事です。私も写真やさまざまな活動を通して、そんな感性や自然観を伝えていきたいと思っています。



写真家

今森 光彦

昭和29年、大津市生まれ、大津市在住。昭和55年からフリーカメラマンに。里山を舞台に身近な動植物を撮り続ける一方、熱帯雨林や砂漠など、あらゆる自然を取材、撮影。木村伊兵衛賞はじめ受賞も多数。写真集やエッセイなど著書も多い。現在「Satoyama 21」と題し、記録映像の上映や講演、トークを展開中。

琵琶湖・淀川の変化を診る

琵琶湖・淀川の水質変化のナゾに迫る

私たちの暮らしを支える大切な生活水の源として、また、多様な生態系を育む場として、琵琶湖・淀川水系は多くの恵みと安らぎを与えてくれています。しかし、人間活動や社会変化の中で琵琶湖・淀川水系にもさまざまな変化が起きています。琵琶湖におけるCOD・窒素の増加、淀川の水質が改善傾向にあるにもかかわらず、毎年のように発生する大阪湾の赤潮...。いったい今、琵琶湖・淀川水系に何が起きているのか？ 当機構では、琵琶湖・淀川水系の水質変化や保全のあり方を見つめるためにシンポジウム「琵琶湖・淀川の変化を診る」を開催しました。今回の特集では、そこに参加された研究者、行政関係者の皆さんによるパネルディスカッションの模様をご紹介します。

コーディネーター及びパネラー紹介 *はシンポジウムの講演テーマ

芦田 和男

工学博士。京都大学名誉教授、(財)河川環境管理財団研究顧問、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構 琵琶湖・淀川水質浄化研究所長。

宗宮 功

工学博士。京都大学大学院工学研究科教授、国際オゾン協会会長、日本水環境学会会長。
*「琵琶湖・淀川の水質変化の総論」

中村 正久

工学博士。アメリカ合衆国ケンタッキー州ルイビル大学環境工学科助教授、世界保健機構勤務等を経て、現在、滋賀県琵琶湖研究所長。
*「琵琶湖の水質変化」

宮本 博司

中国地方建設局吉田夕々士事務所所長、水資源開発公社長、川河口堰建設所長等を経て、現在、近畿地方建設局淀川工事事務所所長。
*「河川管理者からみた変化」

盛岡 通

工学博士。大阪大学大学院工学研究科教授。
*「環境マネジメントからみた水質」

藤田 正樹

大阪府水道部浄水課長、技術長、水道部長を経て、現在(財)大阪府水道サービス公社理事長。
*「上水道の立場からみた変化」

嘉田 由紀子

農学博士。滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員を経て、現在、同博物館研究顧問。精華大学人文学部環境社会学科教授。
*「社会的視点からみた琵琶湖の水質変化」

パネルディスカッション

各パネラーが

それぞれの観点から

琵琶湖・淀川を見つめた

テーマ講演の後に行われた

パネルディスカッション。

琵琶湖・淀川の

水質変化のナゾに

様々な視点から迫り、

さらに琵琶湖・淀川の

今後のあり方についても

意見が交換されました。

コーディネーターは

芦田和男氏です。

COD、BODの乖離： 琵琶湖に何が？

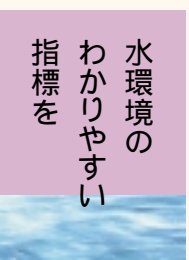
芦田 今年は何世紀最後の1年となりますが、振り返るとこの50年間は非常に大きな変化がありました。世界の人口をみて、50年前は約25億人で、現在は約60億人、いかに爆発的な人口増加があったかが分かります。

このように急激な人口増加に加え、先進国では活発な生産活動を営み、膨大な環境負荷を排出しています。

こうした世界の流れは琵琶湖・淀川流域においても例外ではなく、この非常事態を健全な状態に改善し、次の世代に引き継いでいくことは、我々の使命のひとつではないかと考えます。そのためは、20世紀に我々が何をしてきたのか、どういった変化が発生してきたのか、的確に捕らえ直し、分析する必要があります。

本日のパネルディスカッションは琵琶湖・淀川に関して活躍される方々から、それぞれの研究成果などを話したとき、琵琶湖・淀川の水質現象のナゾに迫るとともに、今後の在り方なぞについても探っていきたいと思います。

まず、琵琶湖の水質環境の変化について、CODは増え、BODが減って



芦田 それでは、水環境を保全していく上での社会システム、環境保全推進システムについてのお考えをお聞かせ願いますか。

宮本 これまで水質をうまく改善してこれたことへの背景には、たぶん水産整備など、みんなが水洗化されて生活が快適になるといってインセンティブがあったわけです。今後は、一面環境負荷を抑えるとか、できるだけ分解できないようなものは出さないといったことに対して、果たして住民の間にインセンティブが出てくるかが、このところの一番大きな問題じゃないかと思えます。

芦田 そうですね。住み馴れからすれば自分にメリットが無いとなかなか動かないですからね。私が比較研究しているアメリカと中国を例にあげると、こちらも共通しているのは、法律で、あるいは上意下達でとにかく管理しようとしていること。しかし、日本では地球の人々のインセンティブをうまく見出し、そのような文化化された方式が必要だと思っています。私は今、わかりやすい指標をつくっていくのですが、それは「子ども達を遊べる水辺を取り戻す、遊んでいかにつかんだ魚を食入られる」

いる」という乖離現象の端的な理由は何かと答えられるでしょうか。

宮本 これは非常に難しい問題が含まれています。まず、調査をする、対象物自身が変化してきているという点も重要です。測れる組成が変わってしまったり、そのような状況なのか、さっぱり判らないのです。琵琶湖の表情を捉える正確なデータの蓄積ができないのです。ですから現段階では、外来の流入物による影響なのか、内成的なものか分解した影響なのか、CODとBODの乖離というのは、いったいこの部分の話なのかを今後追跡していかないと、表面的な話だけではどうもかたりにくいかなと思います。

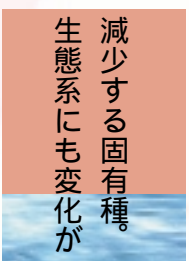
中村 この数年、この問題に関するさまざまな調査研究が行われていますが、十分なデータが揃ったわけではないというところが一つと、それからさまざまな可能性があるということですね。例えば、土地利用の変革とか森林緑田の有機物の流入だとか、一つずつ検証作業していますが、決定打はありませぬ。もししばらく時間がかかるのであればいいでしょうか。

芦田 現在、琵琶湖には様々な水産保全対策が実施されています。下水道の整備もかなり進み、南湖への流入河川の水質は大分よくなっていますが、南湖の水質はそれほどよくなっていません。

盛岡 さらに、日本が高度な産業社会であるという観点から言うと、環境マネジメントシステムを整備し、事業者自らが環境の側面を重視する活動を行うべきです。場合によっては、ISO14001のような外部の認証、評価を与える仕組みを作ることも必要ではないかと。また、事業所が自主的にマネジメントを展開していくよう、行政なり市民団体が方向づけたいと思います。安心・安全な農作物を供給するといった枠組みを作るべきですね。その中できれいな水を一緒に飲もうというアクションも展開されていくと思います。

中村 魚の産卵域が非常に少ないという点も、こういったもの、子どもを遊ばせるために、こういった川、水辺が欲しい。こういった動機が今後インセンティブになっていくのじゃないでしょうか。

中村 魚の産卵域はあまり変わってないのですが、総合的に在来種、固有種が減ってきています。いくつも理由があるかなと思っています。産卵域が非常に少ない



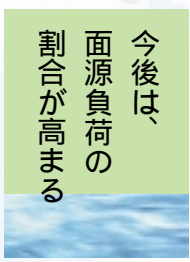
芦田 次に琵琶湖の生態系の変化について、特に魚類については固有種、在来種が非常に減少してきています。

中村 魚の産卵域はあまり変わってないのですが、総合的に在来種、固有種が減ってきています。いくつも理由があるかなと思っています。産卵域が非常に少ない

ない面もあるのですが、現在、滋賀県の流域下水道では高度処理を積極的に進めており、今後点源負荷における窒素分は減少していくでしょう。ただ、自然系・農業系に含まれる窒素分はむしろ増えていく傾向にあるのではないのでしょうか。

芦田 やはり面源負荷の割合が大きいのではないかとですね。

盛岡 面源負荷ですと管理者が決まっております。場所も限定されますが、面源負荷たそうではあります。今後は、面源負荷をもマネジメントできる機構を琵琶湖の流域にもついていたとき、琵琶湖・淀川水質保全機構が持っている湖岸の実権設備と併せて、流出管理のあり方を検討していくことが戦略になってくるのではないのでしょうか。



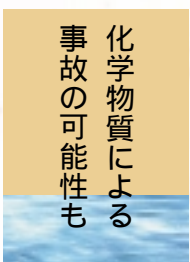
芦田 それでは、淀川の水質に話を移しますが、近年、桂川はきれいになったといわれますが、木津川は水質が悪化傾向にあります。

宮本 端的にいうと、木津川は下水道整備率が遅れているのです。淀川全域

くならってきているのだが、フロッグハウスやフルギルといった移入種の問題もあります。総じて湖岸生態系が単純化していることも含めて食物連鎖自体が変化し、それに応じて在来種を含めた魚の層が変化しています。一方で、工場は水産試験場によって人工河川等で生産することができているので、そういった関係の中で魚の種の変化が出てきているのではないかと言われています。

芦田 琵琶湖博物館でも、魚類の変化が水質にも影響しているのではないかと、一考えから調査を始めたんです。今はフロッグバスやフルギルなどの外来魚が急増しているのですが、外来魚に適した環境を人間が作り出してしまっていることもいえると思います。おっしゃる通り、大きな状況になっているのですが、しかし、まだまだデータが不足していますし、これからの研究課題ですね。

芦田 さて、環境ホルモンを含みいろいろな化学物質が出てきていますが、水への影響はどの程度でしょうか。



芦田 さて、環境ホルモンを含みいろいろな化学物質が出てきていますが、水への影響はどの程度でしょうか。

の下水整備率は80%以上ですが、三重県の木津川流域ではまだ73%なのです。なおかつ木津川の上流は人口が増加し、都市化が進んでいる。人口とともBOD、COD、アンモニア性窒素が高いうち川においては、下水道整備は重要ですね。

盛岡 さらに、山地とか農地からの面源負荷流出の割合が、今後、河川においても琵琶湖と同じような形で高まっていくことは間違いありません。流域の開発に関する社会的なマネジメントを開発していく上では淀川流域がモデルとなるような努力をしていく必要があると思います。

芦田 また、淀川の水質は良好になつてきたが、大阪湾は良くなっていないともいわれます。

盛岡 大阪湾自体は、トータル負荷から言うと、窒素、リンについてそれそれ削減計画が進められており、また高度処理も進んでいますから、負荷量自体は減少方向に必ず進むかでしょう。しかし、瀬戸内海全体として、水質が悪化している閉鎖性水系であることに変わりありません。また琵琶湖の内湖と同じように、大阪湾についても地形の窪みとしての役割が無くなってしまったり、貯留作用も無くなっています。いったん自然を壊したら、人間の手ではそう簡単には戻せません。今後の開発については、人智が及ばないところがあるという控えめな対応をした方がいいのではないかと感じます。

芦田 これだけ生産活動が活発になると、化学薬品を扱い製造している事業所は無数にありますが、水系のごく何を扱っているかはほとんど把握できないのが現状。薬品を扱っているものも下流への影響を考えていませんから、事故が起こる可能性は大きいです。化学物質の使用や生産について規制を強化することが是非とも必要です。現在、府営水道では高度浄水処理を実施し、かなりのものを吸収できていますし、マイクログラムオーダーまでまかなえるガスクロマトグラフを用いた測定も行っていますが、今後さらに対応を進めていかねばならないと思っています。

芦田 琵琶湖・淀川は水環境・文化において先進的な地域です。これからは人間の考えそのものを自然共生型にシフトしつつ、現在の自然科学をフルに使う環境保全、物質循環などに積極的に適用していかなければなりません。そのためは、分かっていないことが多いですが、さらにデータを集積し今後の展開に結びつけていきたいと思います。本日のパネラーの先生方も、ぜひご協力をお願いいたします。



大阪府公害監視センター 環境都市の 創造をめざし、 ダイオキシン対策 にも対応

豊かな環境都市・大阪の実現をめざして、
府内の環境状況を調査し、
環境汚濁防止対策を進める大阪府公害監視センター。
発生源が生活に密着する環境汚染問題が深刻化する今日、
当センターは従来の調査・研究体制をさらに充実し、
環境保全の啓発活動や環境情報の発信にも
積極的に取り組んでいます。



ための化学環境課が発足し、大気、
公共用水域（河川等）、土壌、底質
などの調査分析が行われています。
ダイオキシン類は急性毒性、慢
性毒性、発ガン性など多岐にわたる
毒性を持っています。そのためダイ
オキシン類の調査・分析は、有害物
質が外に漏れないよう、室内を外
部よりも負圧にするなど、細心の
工夫がなされた特別な分析室で行
われます。

さらに、自然界に存在するダイオ
キシン類は、重さの単位に「pg（ピ
グラム）（1gの1兆分の1）」が用い
られるほど微量です。そのため、河
川水中のダイオキシン類を測定す
る場合は、大量の水と時間が必要
となります。まず40ℓの河川水を
汲み取り、それをろ紙などのフィル
ターでろ過します。次に、捕集され
たダイオキシン類を加熱し溶媒の
中に溶かし込み、繰り返し濃縮し
ます。40ℓあった水は、最終的には
50μℓ（40ℓの80万分の1）まで濃縮
された後、高分解能ガスクロマトグラ
フ分析装置で測定されます。当セン
ターでは、今年、府内河川の環境基
準点36地点で分析を行う予定です。

このように、ダイオキシンの調査
には大変な時間と精度が要求され
ており、今後は、迅速かつ正確な数
値の出せる分析方法の開発が課題
となっています。

当センターには、これら環境監視
や調査・分析を行うセクションのほ
か、監視データをさらに科学的に分
析する調査室や環境データの整理・
発信、また環境教育のツール開発を
行う企画室などがあります。「ま
ずは私たちが発信する環境情報を



ダイオキシン検査室は外部より負圧に、気温・湿度も一定に保たれている

「ダイオキシンの発生を防ぐ
ためにも、各家庭でのごみの
減量を」と、服部幸和・化学環
境課課長



観測データは一般に提供 環境対策の基本資料にも

かつて、「水の都」と称されると
も、「煙（スモッグ）の都」とも言わ
れていた大阪。当センターはそんな
大阪の大気を常時監視し、汚染防
止のために必要な措置をとるため
の機関として、昭和43年に開設さ
れました。

河川等の水質の観測・調査は、昭
和57年からスタートし、現在は水質
環境課において行われています。府
下の河川は、雨による増水や地形の
影響を受けた流動変化、水質変化
が激しく、その時々の河川状況を見
ながらのサンプリング・分析がなさ
れています。さらに最近問題になっ
ている、農業や環境ホルモンの物
質の観測も行われています。

水質観測において困難なのが事
故や不法投棄などで有害物質が流
出した場合の発生源の特定です。
特にシアンや有機溶剤などは、捨
てられた場所に痕跡が残らず、汚染
された水もどンドン下流に流れて
しまうので、上流の投棄地点を見つ
け出すことは非常に難しいのだそ
うです。

今年度、淀川流域を含む府内河
川の環境基準点と準基準点あわせ
て53地点で観測を行っており、測定
項目は、農業やダイオキシン類にも
及びます。「しかし、環境基準点や
環境基準項目の測定だけで環境状
況を十分に判断することはできま
せん。さまざまな情報や状況変化に
細かく対応して、測定地点や測定
項目を増やしていくなどの配慮を行
ってきたいと思っています」と、吉田



水中のリンの濃度を測定

誠宏所長。そして、各機関で測定さ
れた観測結果をとりまとめ、水質
情報として一般に提供するのも当セ
ンターの重要な仕事のひとつです。

高い精度が要求される ダイオキシン類の測定

昨年7月の「ダイオキシン類対策
特別措置法」公布に伴い、当センタ
ーでも今年4月、ダイオキシン類によ
る府内の環境汚染状況を把握する



「これからは、淀川を生活用水としてだ
けでなく、文化の源、水の都の原点と
して、守り伝えていくという意識が必要
では...」と吉田誠宏所長

多くの人に見ていただき、それをき
かけに環境保全に関心をもちて
もらえたら...」と吉田所長。インタ
ネットによる情報提供にも積極的
に取り組んでいる当センター。ぜひ
皆さんもホームページにアクセスし
てみてください。
(<http://www.epcc.pref.osaka.jp/center/main.htm>)



琵琶湖・淀川水系の水質 ダイオキシン類 による汚染

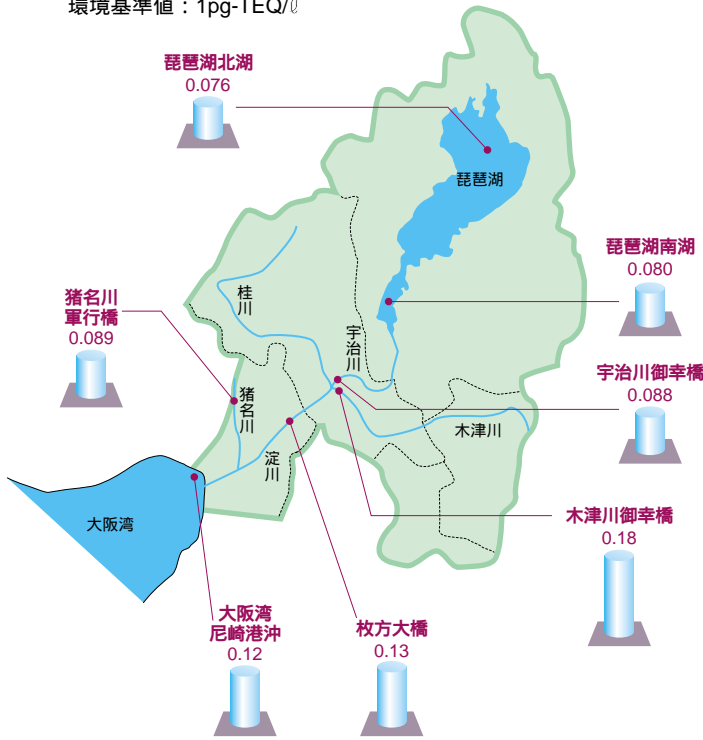
あらゆる面から
環境ホルモンを研究

近年、新たな環境問題として、外因性内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）による生物への影響が国際的に懸念されています。この物質は口や鼻、皮膚から体内に取り込まれると、複雑なホルモンの働きに影響し、人間の精子を減少させるなど、子どもをつくる能力を

狂わせてしまつほか、悪性腫瘍など引き起こす原因にもなります。環境中に多く存在すると考えられていますが、その汚染状況や健康および生態への影響は十分に解明されておらず、わが国でも環境ホルモンを有すると疑われる化学物質67物質をリスト化し、汚染の実態調査をはじめ、健康への影響に関する研究など、あらゆる面から調査を進めています。また、アメリカや

琵琶湖・淀川水系におけるダイオキシン類検出状況例(平成11年度)

単位: pg-TEQ/ℓ
環境基準値: 1pg-TEQ/ℓ



環境庁「平成11年度公共用水域等のダイオキシン類調査結果について」より作成

イギリスなどの各国の関係機関やOECD、WHO等で環境ホルモンの作用を実証する新しい毒性試験法の開発が進められています。

基本となる
基準を設定

ダイオキシン類は環境ホルモンの一つですが、人工化学物質としては最も強い毒性を持つ物質で、人に対する発がん性があるとされています。ごみ焼却のほか様々な発生源から副生成物として発生します。環境中に出た後の詳細はよくわかっていませんが、例えば大気中の粒子などがくっついて地上に落ち、土壌や水で汚染すると考えられています。

平成11年に一生生涯摂取しても健康に影響を及ぼさない安全な摂取量として、「耐容1日摂取量(TDIL)」を体重1kgあたり4pg-TEQ以下としました。また、この数値に基づき公共用水域の環境基準値が1pg-TEQ/ℓに決定。今後は平成9年に策定した「ダイオキシン対策に関する5カ年計画」に基づき、汚染状況等に関する科学的なデータの充実を図りながら、人の健康や生態系への影響の未然防止の観点に立ち、実施可能な対策から着実に推進していくこととしています。

琵琶湖・淀川のダイオキシン類検出状況

環境庁の平成11年度の調査によると、琵琶湖、淀川流域のダイオキシン類の汚染状況は、上図のようになっており、いずれも環境基準である1pg-TEQ/ℓを下回る値となっています。

また、滋賀県では、平成9年度に琵琶湖におけるダイオキシンの実態を把握するために、魚介類および底質について調査を実施しました。その結果、北湖、南湖および瀬田川の10地点の底質からダイオキシン類が検出され、琵琶湖底に広くダイオキシン類が存在していることがわかりました。しかし、いずれも直ちに健康への影響が懸念される濃度レベルには達していません。

海外調査団報告

多様な研究課題に取り組み オーストリア科学アカデミー湖沼学研究所

今回は、当機構がヨーロッパ視察調査の中で訪問した研究施設のひとつ、オーストリア科学アカデミー湖沼学研究所をご紹介します。

湖の国に

開設された研究所

オーストリアの湖沼学は、第一次大戦後、リンツ大学の湖沼学研究所が研究の中心となってきました。しかしその後、オーストリアの湖でも富栄養化が大きな問題となるにつれて、大学の外にも研究施設が必要であるとの声が高まり、モント湖のほとりに研究所を設置する計画が持ち上がりました。そして1981年、新たな研究所がモント湖畔に開設され、リンツの研究所とともに、オーストリア科学アカデミー湖沼学研究所を構成しました。ここでは、藻類生態学、湖底での食物連鎖や底生生物の研究、さらには湖流解析、地下水生態学や古陸水学などの基礎研究に従事しています。

モント湖周辺は、ザルツカマーグート地方といって、2,000m級の南アルプスの山々を縫って、大小あわせて68以上の湖が点在する湖の国です。このザルツカマーグートは三つの州、オーバーオーストリア、



ザルツカマーグートの湖

琵琶湖の水環境改善のヒントに

この地方に点在する湖は、流域人口など、水環境を変化させる要因がそれぞれ異なっているため、その水質も様々です。

当機構が訪れたモント湖やトラウン湖の水質は、たとえば、富栄養化の原因となる窒素及びリンについて、琵琶湖と比べると、全りんが低く全窒素が高い傾向にあります。また、特にモント湖は水温が比較的高く、観光客も多いためザルツカマーグートの中では水質的に最も悪化している湖の一つですが、落ち着きのある景勝地として訪れる人は多く、琵琶湖に共通した点があります。これら個々の湖についての水環境と水質の関係を調べることは、琵琶湖の水質変化のナゾや今後の開発、保全のあり方等に多くのヒントを得る可能性を秘めています。当機構はこういった点からも、オーストリア科学アカデミー湖沼学研究所の取り組みに今後も注目していきたいと考えています。

水 辺からのメッセージ

猪名川上流にある一庫ダム(川西市)の周辺において、8月4日に水資源開発公団一庫ダム管理所の主催による、一庫ダム水源祭りが開催されました。

この祭りは、平成4年から毎年実施されており、一庫ダムの上流部の住民と水を利用している下流部の住民がともに集い、水や水環境の大切さを理解し、上下流の交流を深めることを目的としています。

当日は、天候にも恵まれ、家族連れを中心に約600名の参加がありました。魚のつかみどり、ダムや水に関する展示、太鼓やデクシ

(兵庫県長期ビジョン部署) ビジョン推進課)

一庫ダム管理所が行ったアンケートによれば、参加者の多くが満足されたようですが、中には祭りの費用をダム周辺の整備に充てる方がよいのでは、という意見もありました。しかし、水問題に対する意識の高揚、地域間の交流、連携には、こうした継続的な取り組みが必要です。より良いあり方を求め、来年もこの祭りが賑わうことを期待しています。



祭りの目玉である魚のつかみどりでは、子どもたちがマス、大人はウナギのつかみどりに挑戦。子どもたちは、慣れない手つきで一生懸命に魚を追いかけて、時にはお父さんの助けを借りるなど、ダム周辺には歓声が響きました。

兵庫 住民参加で上下流が交流 「一庫ダム水源祭り」に寄せて

「ランドジャズの演奏、魚つり体験、地元の農産物や「兵庫県の保存飲料水」の販売など、多彩な催しが繰り広げられました。

活動助成報告 平成11年度 助成事業

水の未来を考える3団体を応援

当機構では、琵琶湖・淀川水系の水環境に関する活動に対し、助成事業を行っており、平成11年度は以下の3団体について助成を行いました。

琵琶湖・淀川水系の水環境改善事業

クリアウォーター研究会



構成員 8人
代表 乾 真爾

この活動では、底泥からのリン(水質汚濁の原因)の溶出を抑える浄化材の効果の検証を行いました。浄化材は、琵琶湖湖岸に自生する雑草を豆炭状に加工し、リンの無害化に使用されている硝酸カルシウムを混入しています。実験の結果、混入した硝酸カルシウムは、水中へ緩やかに溶出しており、比較的效果が長期間持続する底質改善の可能性のあることが確認されました。(写真は、完成した浄化材)

琵琶湖・淀川の水辺を愛する活動

西淀川区民の海岸造り推進会議



構成員数 約50人
代表 喜多幡龍次郎

水の都・大阪を愛し、自然環境を考え、みんなが親しめる自然公園造りを目指している当協議会。今回この助成を得て「淀川河口、矢倉海岸八ヶ釣大会」(平成11年10月10日)を行い、住民、行政の協力のもと完成した「矢倉緑地」をアピール。淀川河口の水環境改善に対する住民の関心を大いに喚起しました。

よみがえれ神崎川!市民の会



構成員数 300人
代表 辻口昭夫

神崎川を市民の憩いの場として復活させようと、昭和62年に結成された当会。今回、神崎川と安威川の合流点の河川敷で「よみがえれ神崎川! フェスタ99」を開催。水環境パネルの展示や魚釣り大会を通じて、水環境改善等に対する市民意識の向上を図りました。参加者は約2000人。参加者アンケートでも水環境改善に対する積極的な意見が多く寄せられました。

自然観察会 報告



動植物約100種投げ網体験も

7月29日(日)、夏空の下で開かれた自然観察会(於:琵琶湖・淀川水質浄化共同実験センター/草津市)には、大阪、京都、滋賀などから約70人が参加。水生植物班と植物班に分かれ、100種近い動植物やプランクトンを採取し、観察しました。「投げ網の体験ができて面白かった」「魚は結構生命力が強いんだな」...参加者はそれぞれに自然や生き物について新鮮な感想をもったようです。

編集後記

20世紀は激動の時代といわれますが、水環境についても様々な問題がとりざたされてきました。水環境に見識豊かな先生方で開催されたシンポジウム、早期対策の望まれるダイオキシンの記事等読まれ、皆さんの望む水環境はどういったものであるのか、また、どうしていこうと思われるのか、ぜひご意見をお寄せください。(M O, Y M)



財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構
Lake Biwa-Yodo River Water Quality
Preservation Organization

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構は、淀川水系における河川・湖沼水の水質浄化技術及びこれに関連する技術に関する研究開発、水質浄化事業の支援等を行うことにより、淀川水系の水質保全に寄与し、もって潤いのある地域社会の形成と、関係住民の生活環境の向上に資することを目的としています。